平成３０年度も最後となりました。一年の締めくくりの時期ですね。来月には平成が終わり、新元号がスタートします。新しい節目に向けて、新たな決意をするには絶好の時期と言えます。

今年度最後のメッセージとして、今日は皆さんに次の言葉を贈ります。それは、「自分の決意を人に話そう」というものです。決意とは、「〇〇する」という言葉ですね。英語で言えば、I will 〇〇です。英語ではこれを「意志未来」と呼んでいます。つまり、未来において「〇〇する」という自分の意志を表すわけです。

人に話すことはアウトプットの一つです。情報を知ることをインプット、インプットした情報を伝えることをアウトプットといいます。以前話したとおり、脳の中で、得た知識を使えるものに変換するには、アウトプットしなければなりません。人に話すことはアウトプットの方法の中でも非常に効果的なものです。なぜなら、我々の脳はアウトプットして始めてその情報を使えるものとして認識するからです。

さらに効果的なアウトプットの一つに、自分が理解したことを他人に教えるという方法があります。わかることと教えるということは、大きく異なります。我々教員も、自分の専門を授業で皆さんに教えることでさらに理解を深めています。教師は、教えることで教師になると言ってもいいと思います。つまり、わかることと人に教えるということには次元が違うと言えるほどの差があるのです。

延高のよき伝統の一つにユーモアがあります。先日の卒業式の答辞の中でも、笑う箇所がありそして皆さんもそれに応えていました。言わば、「楽しくなければ延高じゃない」という感じでしょうか。

そこで提案です。その楽しさの中に、知的な楽しさを加えてください。つまり、授業でわかった人がそうでない人に教え合う学校にしてほしいということです。休み時間や放課後の教室が、教え合う場所になるといいと思います。

春休みの前ですから、お薦めの本を一冊紹介することにします。脳は筋肉と同じです。鍛えれば鍛えるほど発達します。読書はそういう知的訓練の一つです。その効果の一つが、自分を客観的に見ることができる、ということです。その結果、自分の悩みが小さく見えるようになります。

さて、今日のお薦めの本は、司馬遼太郎の「坂の上の雲」です。先日、廊下で会った男子生徒が「校長先生、この本、超面白いですね。１巻はあっという間に読んでしまいました！今、

２巻です。」と嬉しそうに話してくれました。

司馬遼太郎氏は日本の歴史小説の第一人者です。最近の歴史小説家ランキングでも、ベスト１０の６冊を彼の著書が占めていました。

この本の主な主人公は正岡子規と秋山真之です。二人とも愛媛県松山市出身の幼なじみ。この二人が明治の日本という激動の時代を生きていく姿を活き活きと描いた小説です。

正岡子規は、近代俳句の創設を脊椎カリエスという難病に苦しみながら成し遂げていきます。秋山真之は、日本海軍の名参謀で戦略の天才と呼ばれました。日露戦争での日本海海戦で、ロシアのバルチック艦隊を打ち破る立役者となります。坂の上にぽっかりと浮かぶ雲を目指して、必死に生きた明治の青年たちの生き様が鮮やかに描かれています。

最後にお知らせです。延高では、男女混合名簿を４月から導入します。これは、男女に関係なくアイウエオ順で出席番号を割り振るものです。始業式で、ジェンダーギャップ指数のお話をしましたね。日本は残念ながら、世界の１４０カ国中１１０番目という男女の格差が大きな国です。

延高が、性に関係なく互いに切磋琢磨する学校になってほしいと考えています。皆さん一人ひとりが、性の格差がない社会の担い手として成長することを期待し、さらに自由な延高へ進化することを願っています。